

## 7才で逝った難病児の、特筆すべきドキュメンタリー番組

「雑学BN」の「TV番組等紹介欄」でも予告案内していたので、ドキュメンタリー番組：「小さな生命スペシャル『愛しているよ、カズ』涙の全記録」をご覧になった方もいるかと思う。

民放のある地方局で放送された折に反響が大きく、今回、その後の家族の様子も追加・再編集して全国放送されたようである。

2才の時に小児がんを患い、2才、6才の時に手術を受けるも地域の幼稚園、小学校に通い、7才で永眠したカズ君と家族を追ったドキュメンタリー番組であった。

難病の子どものドキュメンタリー番組は数多く視聴しているが、この番組は確かに特筆すべきものと思った。

その理由は、他の番組では子どもの永眠は、「〇月〇日 〇時〇分 永眠」という字幕テロップか、ナレーションで終わるものが多いが、この番組は、正に結果としてカズ君の永眠のその日の様子、更に、臨終間際までの家族や医師の動き、更に、その瞬間までもカメラは病室内で回し続けられ、放送時間52分の実に10分が費やされていた点である。

意識の薄れるカズ君に、母親は抱いた時にカズ君がいつも触っていた自分の髪の毛の部分をバツサリと切ってカズ君の手に握らせ、最後は蘇生心臓マッサージを止めてもらい胸に抱き、父親、妹共々一体となってカズ君を抱きしめ、必死にカズ君を呼ぶ様子、更に、医師がまず目の表情で母親に臨終を伝える様子までも…。

この番組の10分間を費やす臨終間際のカズ君と家族や医師の様子等を視聴して、「百聞は一見にしかず」の言葉が浮かんだ。

というのは、最近の子どもは、親戚の方の臨終であっても面会謝絶の病院内であるがために「死」は遠いものであり、また、動画ゲーム機での遊びの普及で、自分の分身であるヒーローはリセットさえすれば何度でも生き返ることから、「死」は無機質で再生するものと思いがちとか。

それだけに、この番組は、子どもたちや学生たちに人の死とはどういうものでどういうことか、また生命の意味、生きるとはどういうことかを、その年齢なりに理解する手助けの教材として十分に活用できるのでないかと思った。

目を開ける力も既になく意識が薄れる中で、母親が耳元で「カズ、愛しているよ」との呼びかけに、かすかに「ボクも…」と答えるカズ君。

家族を、また、人を愛するという意味を、我々に問いかけられるシーンとして鮮明に残っている。